

不登校の子どもがゼロになるまで ～ 小学校SCと中学校SCとの違いを探る ～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

2008年度の全国小中学校での長期欠席者（30日以上）の不登校児童生徒数が減少し、特に小学校の減少率が目立ったこと、私の勤務する都内の小学校での不登校児童数も、昨年秋になり幸いゼロになったことは、前回報告させてもらった。

長年中学校でスクールカウンセラー（以下SC）を務めてきたが、小学校は私自身初めてだった。東京都が臨床心理士を小学校SCとして本格派遣するのも初めてのことで、小学校ではどういう動きが求められ、どのようなやり方が有効なのか、最初は手探り状態というのが正直なところだった。

小学校と中学校との違いを知る手がかりになる準拠枠は2つある。人間の発達が個人の条件と環境との相互作用であることから、発達と組織との2つの軸、すなわち、発達の観点からみれば学童期と思春期、組織形態のレベルでいえば担任王国と教科別担当制という点だ。さらに、この個人と組織のスタンダードな相違と同時に、個人と組織の独自性という個人および組織内差と言われる観点も重要となる。

私が赴任したK小学校の学区内には、大きな児童養護施設がある。この児童養護施設から通う児童は約20名おり、生育環境に恵まれない中から、発達上いろいろな障害や性格の偏りを示したり、感情覚知の未分化や、それに伴う内面と表情との乖離と感情表出の困難が見られたり、さらには、爆発的な感情表出やそれに伴うアクティングアウト、運動共応の未発達など、さまざまな学校生活での不適応行動を誘発する個人傾向が散見される。将来の安定した社会生活への危惧を抱かせる場面も少なくない。

私の専門がキャリア心理、職業心理でもあることから、将来の職業的自立の観点から、子どもたちを見ていくことも重要と考えている。約20年以上関わってきた青少年の職業自立支援の活動を通して得たものと、学童期と思春期の援助である小中学校SCとしての経験は、職業自立の困難

はどこにあるのか、その本質を示唆するものとして、学校現場や家庭での子どもたちのあり方に、教えられてきたところも多い。

私は中学校勤務の間SC職務に関する知識やスキルを蓄積してきた。それらが、小学校ではどのように機能してくれたのか？ それを明確化してみたいと思う。

小学校へ赴任した当初、最も強く感じたことは、小学生の持つ途方もない可愛らしさであった。特に低学年の子どもたちの愛くるしさは、半端ではない。「こんにちは」と声かけすると一瞬ニコリとし、「この人誰かしらん」とランランと好奇の目を向けながら、小さな脚で近づいてくる風情には、正直まいてしまった。キラキラと輝く純真な小さな命が集うその姿は、まことに眩しかった。こんなに牧歌的でヒューマンな魅力ある場が、今の殺伐とした閉塞社会にまだ残っていたのかという、素朴で新鮮な驚きにも似た感動を覚えたのであった。そうして私は、小学校へ通うことがとても興味深くなり、純真で魅力的な子どもたちに会うことが、毎週楽しみにもなっていた。

そんな中で、会ったのが5年生のA君だった。彼は3年生の2学期に転校してきた。最初は登校できていたが、4年生になって不登校に陥る。私が赴任した5年生になって、勇気を出して学校へ来てみたのだが、教室には怖くて入れず、隣の空き教室や掃除道具入れに隠れたりして過ごしていたのだった。

おびえたような表情をしたA君は、なかなか向き合ってくれず、彼とのコミュニケーションは難渋した。途中、掃除道具が飛んできたりもしたが、次第にSCは脅威でないことが伝わり、少しずつ口を開いてくれるようになっていった。その中で、彼がなぜ教室を避けるのかの理由としてわかったことは、教室へ行っても「どうせ悪口を言われるだけだ」と思っていることだった。（つづく）